相談スティグマとキャリア相談の有用性の関係

― 性別と年代の違いに着目した探索的検討―

法政大学大学院 キャリアデザイン学研究科　大澤 博明

法政大学大学院 キャリアデザイン学研究科　古田 克利

The Relationship Between Counseling Stigma and Perceived Usefulness of Career Counseling

－ An Exploratory Study Focusing on Gender and Age Differences ―

Graduate School of Career Design, Hosei University　Hiroaki Osawa　Katsutoshi Furuta

１ 背景・目的

近年、企業ではキャリア相談体制の整備が進みつつあるが、制度が存在しても従業員の相談経験率は必ずしも高くない。企業内でのキャリア相談は、組織内の多様な文脈の中で行われることがあり、従業員の相談行動には主体的なキャリア形成に向けた動機だけでは捉えきれない要因が関与する可能性がある。

こうした要因の理解には、心理的援助の利用行動を扱う援助要請研究が参考となる。援助要請研究では、相談に対する否定的信念である相談スティグマが援助要請を阻害し、サービス評価を低下させることが示されている [1][2]。これらの知見は、行動に至る意思決定プロセスを説明する信念－態度モデルとも整合する[3]。援助要請研究では、援助要請行動やその意図における性別や年齢による違いが報告されているが、企業従業員を対象とした研究で、相談スティグマと相談有用性との関連における属性差は十分に検討されていない。

以上から、本研究は、企業従業員を対象に相談スティグマが相談有用性に及ぼす影響と、その性別･年代差を探索的に検証することを目的とする。

２ 方法

２．１ 調査概要

オンライン調査会社を通じて質問紙調査を実施した。調査時期は 2026 年 2 月、有効回答数は N＝592 名であった。対象は 30～50 代の企業就業者で、性別・年代が均等になるよう割付した。

２．２ 測定尺度

(1) 相談スティグマ

Rickwood et al.[1] および Vogel et al.[2][4] を基に再構成した 9 項目尺度を用いた。回答形式は 5 件法であり、CFA により 1 因子構造と信頼性（α＝.90）が確認された。分析には平均得点を用いた。

(2) 相談有用性

SERVQUAL (Parasuraman, Zeithaml, & Berry) [5] の認知的評価次元を基に再構成した 4 項目尺度を用いた。回答形式は 5 件法であり、CFA により 1 因子構造と信頼性（α＝.88）が確認された。分析には平均得点を用いた。

３ 結果

３．１ 調整効果の検討

相談スティグマが相談有用性に及ぼす影響が性別および年代によって異なるかを検討するため、階層的重回帰分析を行った(表 1)。Model1 では、相談スティグマの主効果に加えて、性別および年代（30 代・40 代・50 代）を統制変数として投入し

た。続く Model2 では、性別×相談スティグマ、30 代×相談スティグマ、50 代×相談スティグマの交互作用項を追加した。

その結果、性別×相談スティグマおよび 30 代×相談スティグマの交互作用が有意であり、相談スティグマの影響が性別および 30 代で異なることが示された。一方、50 代×相談スティグマは非有意であった。

表１ 階層別重回帰分析の結果

	β	R^2
Model1		.017**
Model2		.071***
性別×相談スティグマ	−.16**	
30 代×相談スティグマ	.20***	
50 代×相談スティグマ	−.06	
ΔR^2		.054***

注）** p<.01, *** p<.001

性別（ダミー変数）：男性＝0、女性＝1

年代（ダミー変数）：

40 代＝0、30 代＝1、50 代＝1

従属変数：相談有用性

３．２ 性別・年代別の効果の比較

性別では、男性において相談スティグマが相談有用性に対して正の関連（$\beta=0.16, p<.01$）を示した。一方、女性では弱い負の関連がみられ、有意傾向（$\beta=-0.11, p<.10$）が認められた。

年代別では、30 代で相談スティグマが相談有用性に対して最も強い正の関連（$\beta=0.29, p<.001$）を示した。40 代では関連は非有意であり、50 代では弱い負の関連（$\beta=-0.22, p<.01$）が示された。

４ 考察

本研究では、相談スティグマが相談有用性に及ぼす影響について、性別および年代に着目して検討した。その結果、相談スティグマが相談有用性に及ぼす関連が性別および年代によって異なることが示された。

女性および 50 代では、相談スティグマが相談行動を抑制するという Vogel らの理論枠組み[2][4]と整合する結果が得られた一方、男性および 30 代では関連の強さおよび方向が異なっており、同理論の射程では説明が困難な結果が示された。

なお、本研究にはいくつかの限界がある。本研究は横断データに基づくため因果関係の特定には限界があり、また性別や年代によって関連の方向が異なる理由については、本研究のデータから直接検討することはできない。特に、男性および 30 代でみられた関連の特徴は、相談スティグマが自己価値の低下を通じて相談行動を抑制するという理論的前提だけでは説明が難しく、理論の射程を超える要因が存在することが示唆される。今後は、これらの属性に特有の相談行動プロセスを検討する研究が求められる。

参考文献

[1] Rickwood, D., Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J.: “Young people’s help-seeking for mental health problems”, Australian e-Journal for the Advancement of Mental Health, Vol.4, No.3, pp.1-34 (2005)

[2] Vogel, D. L., Wade, N. G., & Haake, S.: “Measuring the self-stigma associated with seeking psychological help”, Journal of Counseling Psychology, Vol.53, No.3, pp.325-337 (2006)

[3] Fishbein, M., & Ajzen, I.『Belief, Attitude, Intention and Behavior』Addison-Wesley. (1975)

[4] Vogel, D. L., Wester, S. R., & Larson, L.: “Avoidance of counseling: Psychological factors that inhibit seeking help”, Journal of Counseling & Development, Vol.85, No.4, pp.410-422 (2007)

[5] Parasuraman, A., Zeithaml, V. A., & Berry, L. L.: “SERVQUAL: A multiple-item scale for measuring consumer perceptions of service quality”, Journal of Retailing, Vol.64, No.1, pp.12-40 (1988)